りびんぐらいぶず　令和元（2019）年12月第2号

ご門徒さんの通夜布教の御法話の実際

◆破地獄の御文（はじごくのごもん）

其佛本願力（ごぶつほんがんりき　：　其の佛の本願力によって）

聞名欲往生（もんみょうよくおうじょう　：　名を聞きて往生せんと欲えば）

皆悉到彼国（かいしつとうひこく　：　みなことごとくかの国に到りて）

自致不退転（じちふたいてん　：　自ずから不退転に到らん）

（Ref『梅原真隆述『往覲偈講話』p46）

◆はじめに

毎月のご尊前での寺院活動「仏教壮年会のお聴聞の会」「仏教婦人会の例会」等で御門徒様も住職も心身共に無事であったとしてお互いに顔つき合わせてお聴聞が出来ているならば、当面の心配はありません。

けれども、いつの間にかお姿が見えないままになっていて、あるとき、ふとお家から「実は、〇〇が亡くなりましたので、枕経をお願いしたいのですが」と御電話を頂戴するときにはとりつく島のない寂しさに襲われます。

もしもできることなら直前に枕辺に歩みを運び**「南無阿弥陀佛。お念仏ですよ。他に何も案ずることはありませんよ。」**と御言葉を掛け、お念仏申させて戴くことができる途はなかったであろうか、というのが住職の課題だったからです。

今一つは、ご年齢がお若いため、お勤めのお仕事最優先になるがゆゑに日頃のご本堂でのお聴聞も叶わず、突如訃報が舞い込む時であります。

お仕事最優先とは飽くまで外見上でのお話ですから、ご本人の人生観や苦悩の現実まではなかなか見えて参りません。だから応えたとしてもその回答で十分応えたことにはならないことが一般だったからです。

十七世紀のフランスの哲学者パスカルの『パンセ』に次のような一節があります。

「私は人間が光りなくうち捨てられて、いわば宇宙のこの一角に迷い込んで、誰によってそこにおかれたのか、何をしにここへ来たのか、死ねばどうなるのかを知ることなく、何を認識する能力ももたずにいることを見つめるとき、恐怖に襲われる」と（伊藤邦武『物語哲学の歴史』）

洋の東西に同様な悩みが存することに驚き入ると共に、私としては、せめて、お聖教に示されたご本願の物語は丁寧にお伝えして、実践的にお念仏して共に聞名して安心したいというのが現実の姿だからです。

◆お通夜の御法話から

皆様、今宵は、遠近各地より、ようこそお通夜に駆けつけて戴きました。皆様方のご参列によって、故人の通夜のお荘厳が見事に輝いて下さいました。実に有難うございました。

一昨日の朝、思いがけなくも○○ちゃんの訃報に接しました。訃報はいつのときも予想できませんが、まだまだ現役の若さですから、一体どのお経から上げさせて戴こうかと思案に暮れたほどです。何から手をつけたものかと思案に暮れるお姿はご遺族も変わりがありません。ご本人は仕事第一で職場では頼りにされ、母親の身を何より案じていましたから、介護引取先が定まり、やっと自らの手術の日程が定まったのはその後で、自らの余命も尽きることになっていたのです。

先ほど故人のお棺に、ご遺族と共に**『破地獄の御文』**をお納めしました。

『破地獄の御文』とは、何か。これはいわば俗称であります。『仏説無量寿経』の下巻『往覲偈（おうごんげ）』の一節、「**其佛本願力　聞名欲往生　皆悉到彼国　自致不退転**（その佛の本願力によって　名を聞きて往生せんと欲（おも）へば　皆悉く彼の国に到りて　自ずから不退転に到らん）」であります。如来様のご本願の思し召しに疑いなく頭を垂れる人は、例外なく、衆生は阿弥陀如来の本願力にお遇いさせて戴きます。ご遺族は、導師に導かれて故人の胸の上に『破地獄の御文』を捧げます。

昔、中国の漢の時代に一つの逸話があります。玄通律師（げんつうりっし）が旅の途上で野中のお寺に宿ったとき、隣の坊舎でこの御文を誦えるのを聞いたことがあったそうです。

その後、律師が戒律を破ったために地獄に堕ちて閻魔王に裁かれるとき、ふとこの御文を思い起して誦えたところが、閻魔王は冠を傾け、痛く感動して拝んだという逸話です。

私たちは、ご縁はあっても阿弥陀仏の本願力とは何かを知らず、生涯において、これを真摯に頂戴することが容易ではありませんが、お通夜の席上であるからこそ、何故これが有り難いかを皆様と共につくづくと振り返らせて戴かないわけには参りません。

私たちは、生涯において、如来様のご本願のお謂われを疎かに聞きがちでありますが、その一方で、様々な悪を造ること、戒律を破ることは疎かではありません。

そのような衆生に対して、阿弥陀如来様は、本願力回向によって破地獄のご文を手向けお名号を聞かしめられるのです。

これによって、どなた様も、いかなる愚かな者も、勝れた人も一人の例外もなく、『破地獄の御文』を改めてお聞かせに与ることができことになります。

お名号をお聞かせに与ること、聞名（もんみょう）ひとつで、阿弥陀仏の本願力を信ぜしめる力「本願力」を賜り、やがて間違いなく阿弥陀仏の浄土に生まれるや、迷いを転じて悟りを開くご縁に導かれるのであります。

さて、お「通夜」とは、夜を通すと書きます。お「通夜」のことをまた「夜伽」（よとぎ）とも申し

ます。「伽」とは、お伽話の「とぎ」、寝物語をしてお看取（みと）りをすることなのです。

もうお亡くなりになったに違いないけれども、親しかった方々がとるものもとりあえず大急ぎで駆けつけて、一夜最後のお看取りをさせて戴く。それがお通夜だったのです。

お話し相手をするといってもご返事は返ってはきませんが、お側に待って故人のご生涯を偲ばせて戴く。今生での故人との出会いを顧みる。

いいえ、故人との出遇いを通して、私たち自身が人間世界に生涯を恵まれた不思議を噛みしめつつ、「思い出深いお出遇いでしたね。」と、振り返らせて戴くのです。

お通夜のお勤めは、そのご当人が営まれる『お正信偈』の最後のお夕事だったのです。ご縁のある私たち皆がその場に参じて一緒にお勤めさせて戴くのです。

決して、亡くなった方にお経を上げるのではありません。

今宵は、このご縁に、お手許に配布させて戴いた『浄土真宗の救いのよろこび』をご一緒に頂戴することに致しましょう。

肝要は御文章を頂戴しますが、ご当人のお勤めなのですから、ここで『白骨のご文章』を上げるというのは当たりません。ご文章を上げるのならいつもご本人が聞いていらっしゃった御文章、毎月のお逮夜参りの都度上げさせて戴いていた御文章を上げさせて戴きましょう。ですから今宵は『信心獲得章』を上げさせて戴くのです。南無阿弥陀仏。合掌。

◆除夜の鐘　十二月三十一日二十三時半(火)
◆修正会（元旦会）　元旦（水）　午前七時

著作編集兼発行元（本願寺派 正覚寺内）〒520-0501 大津市北小松四五二番地
TEL077-596-0166、FAX077-596-0196 住職 堅田 玄宥